

## 謝罪の生起状況と感情体験について

— 「誠実な謝罪」と「道具的謝罪」に着目して—

Levent TOKSOZ

### 1. はじめに

我々は日常的に、相手を怒らせたり、不愉快にさせたりするような場面に遭遇し、対人葛藤を円滑に終結させるために、弁明(account)と呼ばれる方略を用いる。弁明とは、トラブル場面における言語的説明であり、「否認」、「正当化」、「弁解」、「謝罪」が弁明の種類として位置付けられている(Itoi, Ohbuchi, & Fukuno (1996))。中でも「謝罪」が問題解決の方略として効果的であることが知られている。「謝罪」とは、自分のあやまちや相手にかけた迷惑によって相手に不愉快感情が生じた場合、その責任を認め、許しを乞い、相手との人間関係における均衡を修復するという目的を達成するための行為である(熊取谷(1993))。「謝罪」の定義でも指摘される「責任の認め」「許しの乞い」のような要素が、「謝罪行為」を行う際に実際の会話でも観察される。例えば、「謝罪行為」について、談話分析を行った Robinson(2004)は、「負事象の認知」(「ご迷惑かけました」)、「責任受容」(「そうなったのは自分のせいです」)、「悔悛表明」(「申し訳ないことをしました」)、「被害者へのいたわり」(「辛い思いをされたと思います」)、「更生の誓い」(「二度としません」)、「赦しを請う」(「どうか赦して下さい」)の6つの言語的要素を抽出している(日本語訳は大淵憲一(2010:4)による)。対人葛藤場面では、被害者に「謝罪行為」を行うことによって、被害者の不快感情が軽減し(Ohbuchi, Kameda, & Agarie (1989))、加害者の人物印象が改善され(Darby & Schlenker (1989))、加害者に対する被害者の処罰反応を軽減する(Darby & Schlenker (1982))ことが明らかにされている。

「謝罪」には、その動機から、「責任の受容」と「罪悪感」の認識が伴うか否かによって、「誠実な謝罪」と「道具的謝罪」があり、後者が、処罰の回避や仲間による拒否を避ける等、何らかの目的を達成するための「謝罪」である(中川, 山崎 (2004);(2005))。子供は6歳児になると「誠実な謝罪」ができる(中川, 山崎 (2004))だけでなく、相手との親密性によって「誠実な謝罪」と「道具的謝罪」を使い分けられるようになる(中川, 山崎, (2005))。日本社会では、葛藤場面において「謝罪」が好まれ、その背景に、人間関係を大切にする集団主義文化があることが指摘されている(大淵 (1999))。また、日本では、相手に嫌われないように、相手に怒られないように、表面上とにかく遜り、自分の方が社会的関係の点で低いことを示す「印象操作の自己呈示」としての「謝罪」、要するに、「道具的謝罪」が多用されていることも報告されている(齊藤, 荻野 (2004))。

このように、日本では「謝罪」が好まれていること、また、「道具的謝罪」が多用されていることが指摘されている。しかし、これらの研究の多くが、いくつかの状況設定文を被験者に呈示し、それへの反応を求めるような方法を取っている。本研究では、より包括的な観点から、日本では「誠実な謝罪」と「道具的謝罪」がどのような状況で生じるのか(「生起状況」)、また、その際、「謝罪者」は何を感じているのか(「感情体験」)を整理し、対照することを目的としている<sup>1)</sup>。

## 2. 方法

国立A大学に在籍する日本人大学生97名(男性:41名、女性:56名、平均年齢:21歳、SD:.8歳)を対象に、自由記述式の質問紙調査を行った。調査協力者には、「最近、謝罪すべきだと思って、謝罪した経験」(「誠実な謝罪」条件)と「最近、本当は謝罪する必要はないと思ったが、結局、謝罪することにした経験」(「道具的謝罪」条件)をそれぞれ想起させ、その場面、および、その時の感情を記述してもらった。「誠実な謝罪」条件と「道具的謝罪」条件別に、「謝罪場面」に関する回答をKJ法<sup>2)</sup>(川喜田(1967))によって分類した。また、「感情体験」に関する回答をKJ法とテキストマイニング手法<sup>3)</sup>を用いて分析した。なお、本研究で、具体的な出来事を「謝罪場面」、それらの特徴を整理した場面の大きなカテゴリーを「謝罪生起状況」と記す。

## 3. 分析結果

### 3.1. 「誠実な謝罪」と「道具的謝罪」の「生起状況」

#### 3.1.1. 「誠実な謝罪」の「生起状況」

回答に不備があった1名を除き、96名によって挙げられた場面をKJ法によって分類した。そして、分類の信頼性を確認するために、言語学専攻の大学院生一名に、各カテゴリーの定義のみを説明し、全てのデータを分類するように求めた。分類されたカテゴリーが筆者と不一致であった場合には、二者の協議により再分類を行った。二者の一致率は93.7%であった。表1に示したように、96場面は、報告人数が多い順に、(1)【責務不履行】(2)【約束違反】(3)【傷つけ】(4)【被援助】(5)【儀礼】(6)【期待外れ】(7)【間接加害】(8)【関係修復】(9)【冤罪自覚】の9つの「生起状況」にカテゴリー化された。

【責務不履行】は自分のミスや不調によって、果たすべき責任を果たせないような場面、【約束違反】は遅刻や忘れ等によって、約束を守れないような場面、【傷つけ】は相手の財産、気持ち、身体を傷つけるような場面、【被援助】は援助を受けることによって、相手に迷惑をかけたと認識されるような場面、【儀礼】は社交儀礼的に、マナーとして「謝罪」が行われるような場面、【期待外れ】は相手の期待に応えられず、足を引っ張るような場面、【間接加害】は自分には直接非はないが、何らかの形で加害に関わってしまうような場面、【関係修復】は喧嘩した相手と元の関係に戻りたいような場面、【冤罪自覚】は相手には非

が無かったことを自覚できたような場面から成っている。

表1 「誠実な謝罪」の「生起状況」に関する分類結果

大 カテゴリー	サブ カテゴリー	報告人数と 割合(%)	実際の記述例
責務不履行	ミス	28 (29.1)	重要な売り上げ計算のミスがあって、バイト先の先輩に謝った。
	不調	3 (3.1)	風邪で部活の練習を1日休んで「迷惑をかけました」と謝った。
約束違反	遅刻	22 (22.9)	約束の時間に遅れてしまい、待ち合わせ場所で謝罪をしました。
	忘れ	4 (4.2)	妹に必要な書類を郵送する約束をしていたが、郵便局に行くのを忘れた。
	取り消し	3 (3.1)	友達と遊ぶ予定をたてていたが、急に実家に帰ることになった。
傷つけ	感情	6 (6.3)	友人のコンプレックスを口にしてしまって不快な思いをさせた。
	財産	4 (4.2)	体育館で先輩のものをふんでしまった。
	身体	1 (1.0)	悪ふざけが過ぎて、弟に怪我をさせてしまったとき。
被援助		8 (8.3)	友人に長い時間相談ののってもらった。
儀礼		6 (6.3)	駐輪場で自転車を出すのに時間がかかり、歩行者に謝った。
期待外れ		4 (4.2)	せっかく先輩からパスをもらってシュートを打てる決定的な時にシュートを外した。
間接加害		3 (3.1)	自分が実習で福山に行く際、サークルの先輩に送ってもらったが、その途中で信号の存在に気づかず信号無視をしてしまい、警察につかまってしまった。
関係修復		2 (2.1)	お母さんとけんかして仲直りする時。
冤罪自覚		2 (2.1)	友人が自分を裏切ったと思い込んでいたら、実は友人は全く裏切るような行為をしていなく、その時謝罪した。
合計		96 (100)	

報告人数の割合を見ると、【責務不履行】(32.2%)と【約束違反】(30.2%)がいずれも3割台で上位に来ており、この二つの「生起状況」だけで、全体の6割程度を占めていることが分かる。しかし、表1から、【責務不履行】はサブカテゴリーの〔ミス〕に、【約束違反】はサブカテゴリーの〔遅刻〕に偏っている。また、【傷付け】(11.5%)は1割を少し超えているが、【被援助】、【儀礼】、【間接加害】、【冤罪自覚】はいずれも1割未満であり、比較的体験頻度が低い。

### 3.1.2. 「道具的謝罪」の「生起状況」

「道具的謝罪」の「生起状況」については、「思い出せない」等、場面を想起できなかった22名を除き、75名を対象にした。3.1.1.と同様にKJ法による分析を行なった。また、分類の結果、筆者と大学院生二者の一致率は96%であった。表2に示したように、75場面は、報告人数が多い順に、(1)【公的立場】(2)【儀礼】(3)【関係修復】(4)【指摘・文句】の4つの「生起状況」にカテゴリー化された。

【公的立場】はサークルやバイト先のような組織において、「秩序を守る」、「組織を代表する」というような場面、【儀礼】は社交辞令的に、もしくは、「決まり文句」として行われるような場面、【関係修復】は喧嘩した相手と元の関係に戻りたいような場面、【指摘・文句】は相手に指摘され、文句を言われるような場面からなっている。

表2 「道具的謝罪」の「生起状況」に関する分類結果

大 カテゴリー	サブ カテゴリー	報告人数と 割合(%)	実際の記述例
公的立場	組織秩序	18 (24.0)	バイト先で、他人のミスを自分のせいにされ、店長に怒られた。
	組織代表	12 (16.0)	バイト先でお客様が求めていた商品が品切れで文句言われた。
儀礼	問題回避	10 (13.3)	電車の中で知らない相手の荷物が自分にぶつかったとき。
	決まり文句	7 (9.3)	目上の人に日時等の確認を取るとき「申し訳ありませんが」と謝罪文のようなものを使った。
関係修復		15 (20.0)	けんかした友達の機嫌をとるために、私が悪かったと謝った。
指摘・文句		13 (17.3)	友達に言った冗談が通じなくて、文句を言われた。
合計		75 (100)	

報告人数の割合に関しては、【公的立場】(40%)が最も多く、日本人大学生には、比較的頻繁に体験されている。以下、【儀礼】(22.6%)、【関係修復】(20%)、【指摘・文句】(17.3%)の順に並んでおり、2割前後程度のこれらの「生起状況」はお互いに近い値を取っている。

### 3.2. 「誠実な謝罪」と「道具的謝罪」における「感情体験」

#### 3.2.1. 「誠実な謝罪」における「感情体験」

「誠実な謝罪」における「感情体験」に関して、96名によって挙げられた記述回答を一つのプールにして、全てを足すと、267になった<sup>4)</sup>。これらの回答を、表3の通り、報告人数が多い順に、(1)【後悔・罪悪感】(2)【遺憾】(3)【不安・恐怖】(4)【悲哀】(5)【更生希望】(6)【赦し希望】(7)【補償】の7つの「感情体験」にカテゴリー化した。

表3 「誠実な謝罪」の際における「感情体験」に関する分類結果

大カテゴリー	サブ カテゴリー	報告人数と 割合(%)	実際の記述例
悔悛・罪悪感		92 (95.8)	もっと早く支度をすればよかった。
遺憾		84 (87.5)	迷惑をかけて、申し訳ない。
不安・恐怖		28 (29.1)	相手が怒ってないかどうか不安。
	恥ずかしさ	6 (6.2)	恥ずかしい気持ち。
悲哀	悲しみ	5 (5.2)	悲しい。
	情けなさ	5 (5.2)	自分が情けない。
	辛さ	4 (4.1)	ツライ。
更生希望		16 (16.6)	次から気をつけよう。
赦し希望		14 (14.5)	許して欲しい。
補償		4 (4.1)	迷惑かけた分を取り返さなくちゃいけない。
その他		9 (9.5)	家族に会う方が優先だと思った。
合計(延べ報告人数)		267	

【悔悛・罪悪感】は自分の行為を悔い改める気持ち、【遺憾】は相手に迷惑をかけたという「負事象認知」と「申し訳ない」という「済まなさ」の気持ち、【不安・恐怖】は相手に怒られているのか、「謝罪」が伝わっているのか等、「心配」の気持ち、【悲哀】は「恥ずかしさ」、「悲しみ」等、「哀れな」気持ち、【更生希望】はその過ちを今後繰り返したくない

気持ち、【赦し希望】は赦されたい気持ち、【補償】はかけた迷惑を償いたい気持ちを表す「感情体験」である。

報告人数の割合を見ると、【悔悛・罪悪感】(95.8%)と【遺憾】(87.5%)が「誠実な謝罪」における基本的な感情であることが窺える。【不安・恐怖】(29.1%)が3割程度であり、【悲哀】(20.7%)が2割程度の人に挙げられている。【更生希望】と【許し希望】が1.5割程度であり、【補償】(4.1%)の報告人数が最も少なく、限られた場面でしか起きない「感情体験」と考えられる。

そして、表3で示されたKJ法による分類の信頼性を確認するために、テキストマイニング手法を用い、ことば同士の使用パターンを検討した。出現頻度が5以上の形態素を対象に、各回答者の回答×各形態素のクロス表への階層的クラスター分析を行った(ユークリッド距離、Ward法)。その結果、図1の通り、5つのクラスターが抽出された。

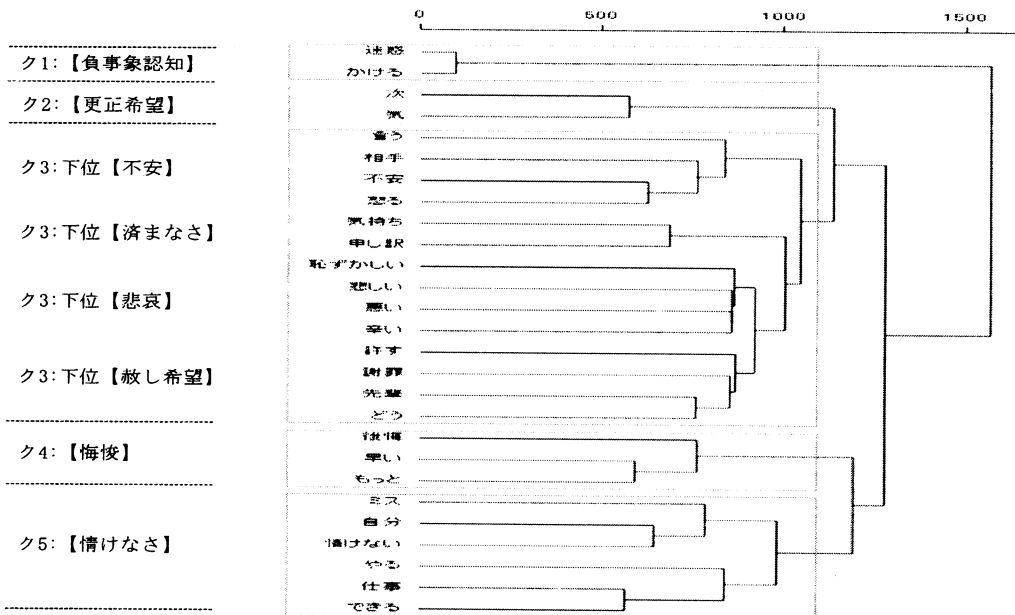


図1 「誠実な謝罪」における「感情体験」のデンドログラム

第1クラスターは「迷惑をかけた」という【負事象認知】、第2クラスターは「次は気をつけよう」という【更生希望】と関わりのある語からなっている。第3クラスターは、「感情体験」をまとめるようなクラスターであり、4つに下位分類されていると考えられる。それらは、「相手が怒っているのか不安」という【不安】、「申し訳ない気持ち」という【済まなさ】、「恥ずかしい」、「悲しい」、「悪い」、「辛い」という【悲哀】、そして「謝罪によって許されたい」という【赦し希望】に関するものである。第4クラスターは、「もっと早くすればよかった」という【悔悛】を、最後に、第5クラスターは「自分のミスが情けない」

という【情けなさ】の気持ちを表していると考えられる。

このように、「誠実な謝罪」における「感情体験」について、図1で示されたテキストマイニングによるクラスター分析の結果は、表3で示されたKJ法による分類結果とその内容において実質的に一致していると言えよう。

### 3.2.2. 「道具的謝罪」における「感情体験」

「道具的謝罪」における「感情体験」について、3.2.1.と同様な方法で分析を行った。75名によって挙げられた記述回答を一つのプールにして、全てを足すと、144になった。これらの「感情体験」は、表4の通り、報告人数が多い順に、(1)【不納得】(2)【怒り・苛立ち】(3)【諦め】(4)【謝罪選択】(5)【悲哀】(6)【謝罪要求】(7)【不安・恐怖】(8)【軽い済まなさ】の8つの「感情体験」にカテゴリー化した。

表4 「道具的謝罪」の際における「感情体験」に関する分類結果

大 カテゴリー	サブ カテゴリー	報告人数と 割合(%)	実際の記述例
不納得		49 (65.3)	納得できない。
怒り・苛立ち	怒り	24 (32.0)	腹が立つ。
	苛立ち	9 (12.0)	イライラ。
諦め	仕方なさ	13 (17.3)	仕方がない。
	面倒臭さ	9 (12.0)	面倒くさい。
謝罪選択		11 (14.6)	とりあえず謝っておこう。
悲哀	悲しさ	5 (6.6)	悲しい。
	悔しさ	4 (5.3)	多少悔しかった。
謝罪要求		5 (6.6)	自分が謝れば、相手からの謝罪もあるのではないかという気持ち。
不安・恐怖		4 (5.3)	自分は悪くはないと思ったが、さらに怒られるのが嫌だったので謝罪しました。
軽い済まなさ		4 (5.3)	少し申し訳ない気持ち。
その他		7 (9.3)	自分はこういう人にならないように気を付けようと思った。
合計(延べ報告人数)		144	

【不納得】はその状況に納得がいかず、理不尽だと感じる気持ち、【怒り・苛立ち】は謝罪する状況に陥ったことに抱かれる腹立ちとイライラ感、【諦め】は事情説明を面倒臭く感じ、仕方なく諦めること、【謝罪選択】は「謝罪」の必要性を感じること、【悲哀】は「恥ずかしさ」、「悲しみ」の「哀れな」気持ち、【謝罪要求】は相手にも「謝罪」してもらいたい気持ち、【不安・恐怖】は相手に怒られるのではという「心配」の気持ち、【軽い済まなさ】は「少し申し訳ない」という気持ちを表す「感情体験」である。

報告人数の割合から見ると、第1位の【不納得】(65.3%)を5人中3人以上が感じていたことになる。そして、第2位の【怒り・苛立ち】(44%)が4割台になっており、5人中2人以上に報告されている。これらが、「道具的謝罪」における基本的な感情であることが窺える。次に、【諦め】(29.3%)と【謝罪選択】(14.6%)が続く、これらは、「道具的謝罪行為」

の選択に繋がる認知的な過程とも考えられる。その次の【悲哀】(11.9%)は1割を少し上回っているものの、【謝罪要求】(6.6%)、【不安・恐怖】(5.3%)、【軽い済まなさ】(5.3%)の報告は1割未満であり、「感情体験」としては、限られた場面でしか生起していないようである。

さらに、「道具的謝罪」における「感情体験」に関する回答について、出現頻度が4以上の形態素を対象に、クラスター分析を行った(ユークリッド距離、Ward法)。結果、図2に示されている通り、5つのクラスターが抽出された。

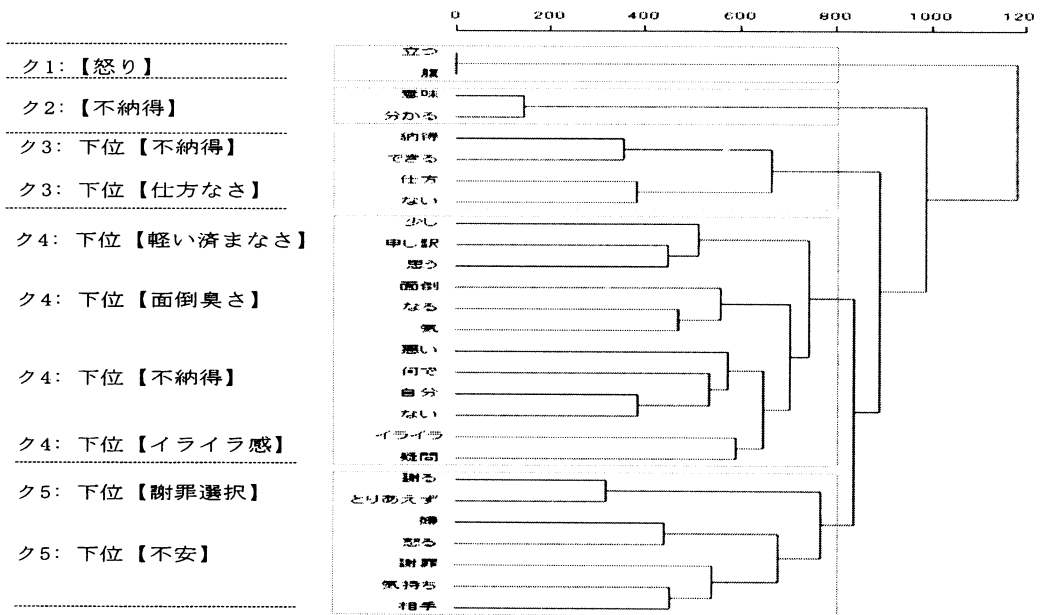


図2 「道具的謝罪」における「感情体験」のデンドログラム

第1クラスターは「腹が立つ」という【怒り】、第2クラスターは「意味が分からない」という【不納得】と関わりのある語からなっている。第3クラスターは、「納得できない」というやはり【不納得】と、「仕方ない」という【仕方なさ】に下位分類される。第4クラスターは、「感情体験」をまとめるようなクラスターであり、「少し申し訳ないと思う」という【軽い済まなさ】、「面倒くさい」という【面倒臭さ】、「自分は悪くないのに」という【不納得】、「疑問を感じ、イライラする」という【イライラ感】に下位分類されている。第5クラスターは、「とりあえず謝罪する」という【謝罪選択】、「相手に怒られたくない」という【不安】と関わりのある語からなっていると考えられる。

【不納得】という「感情体験」が、一つ以上に抽出されている理由としては、この「感情体験」に関する記述が、「意味が分からない」、「納得できない」、「自分は悪くないのに」のように、様々な表現で表わされていたからである。

このように、「道具的謝罪」における「感情体験」について図2で示されたテキストマイニングによるクラスター分析の結果は、表4で示されたKJ法による分類結果とその内容において実質的に一致していると言えよう。

#### 4. 考察と結論

本研究では、日本では「誠実な謝罪」と「道具的謝罪」はどのような状況で生じるのか(「生起状況」)、また、その際、「謝罪者」は何を感じているのか(「感情体験」)を整理し、対照することを目的とした。

まず、「責任の受容」と「罪悪感」の認識を伴う「誠実な謝罪」の「生起状況」に関しては、【責務不履行】と【約束違反】が全報告数の6割を占めていた。前者は〔ミス〕、後者は〔遅刻〕というサブカテゴリーに偏っているが、これらが、日本人大学生にとって「誠実な謝罪」の生起しやすい状況、そして、頻繁に体験される状況であると言えよう。挙げられた場面と謝罪相手の特徴から、【責務不履行】は「バイト先」等、公的な場で、【約束違反】は友達が相手の私的な場で生じやすいと考えられる。「誠実な謝罪」に関する実証的研究では、「コーヒーの溢し」、「本の紛失」等、【傷つけ】状況のエピソードが設定される事が多いと思われるが、本調査の結果では、【傷つけ】の報告数は1割程度に留まっており、【被援助】、【儀礼】、【間接加害】、【冤罪自覚】も1割未満であった。これらは「誠実な謝罪」の「生起状況」ではあるが、日常生活では、頻繁に体験はされない。

一方、「責任の受容」と「罪悪感」の認識を伴わない「道具的謝罪」の場合、【公的立場】が全報告数の4割を占めており、【儀礼】、【関係修復】、【指摘・文句】がそれぞれ2割程度で並んでいた。【公的立場】は「バイト先」や「サークル」のような上下関係の強い場で起こりやすいと考えられる。相手が「店長」や「先輩」等、社会的に目上というだけではなく、謝罪者にとっては、今後付き合い続ける可能性の高い相手でもある。このような相手を不愉快にさせたりするリスクをとるよりは、「道具的」でありながらも、「謝罪行為」を行う方が利益につながると考えられる。それに対して、【儀礼】は、相手が知らない人で、その場限りの人間関係というのが特徴的である。一方、【関係修復】と【指摘・文句】は、謝罪相手が友達であることが多く、人間関係を崩さないために、「道具的謝罪」が使用されている。

また、【儀礼】という「生起状況」は、「誠実な謝罪」と「道具的謝罪」の両方で抽出されているが、後者では、相手に「謝罪状況」を気付かせ、結果的にはあっても、自分が「謝罪」される戦略という役割もある。例えば、「道具的謝罪」で挙げられた「電車の中で知らない相手の荷物が自分にぶつかったとき」、「数人のグループが細い通路を塞いでいた時」のような場面では、「自分が謝れば、相手からの謝罪もあるのではないかという気持ち」、「相手に邪魔だと気づかせるため」のような回答が見られた。

そして、「感情体験」に関しては、「誠実な謝罪」の場合、当然ながら【後悔・罪悪感】



と【遺憾】の気持ちが顕著であり、【悲哀】のような後ろ向きの感情と、【更生希望】のような前向きの感情が見られ、謝罪者が赦しを請う。「謝罪行為」が行われる際に、これらの感情が言語的要素としても見られる (Robinson (2004))。一方、「道具的謝罪」の場合、【不納得】と【怒り・苛立ち】が基本感情となっており、【諦め】【謝罪選択】が見られる。これらは、謝罪者が、置かれた状況に納得がいらず、【怒り・苛立ち】を感じながらも、「否認」、「正当化」、「弁解」のような弁明が「面倒臭い」と思い、「仕方なく」、「謝罪行為」に移るプロセスを表している。そして、「謝罪」することによって、【悲哀】のようなネガティブな感情を抱くこともある。日本では、相手に嫌われたくないという、「印象操作の自己呈示」として「道具的謝罪」が多用されていることが指摘されているが (齊藤, 荻野 (2004))、それは、決して気楽に行なわれる行為ではないこと、言い換えれば、コストの高い行為であることが今回の調査結果から窺える。にも関わらず、「謝罪」以外の弁明が諦められるのは、それらの方略が上手く使いこなせないこと、もしくは、それによって問題解決に至るといふ見込みが薄いことが示唆され、今後の弁明教育の在り方を考えさせる。また、「道具的謝罪」の「感情体験」としては、報告人数は少ないが「軽い済まなさ」も抽出された。自分に非の無い場面でこの感情が顕著化されるのは一見矛盾しているようにも見えるが、これは、特に、「バイト先でお客さんが求めていた商品が品切れで文句を言われた」のような、自分に非はないが、ある程度迷惑をかけてしまったことを認める時に起こると考えられる。

本研究では、日本では「誠実な謝罪」と「道具的謝罪」がどのような状況で生じるのか(「生起状況」)、また、その際、「謝罪者」は何を感じているのか(「感情体験」)を検討した。しかしながら、今回の調査には限界があり、今後の課題も残されている。今回の調査では、包括的な観点から「謝罪場面」と「感情体験」の収集に焦点を当てたが、どの「謝罪場面」でどのような「感情体験」が生じやすいのかが検討されていない。今後、「謝罪場面」と「感情体験」の関連性を量的に示し、また、各場面における謝罪行為を言語そのものの側面から比較する予定である。

## 注

- 1) 本稿のデータの一部については、社会言語科学会第31回大会において発表を行った。
- 2) 地理学者川喜田二郎 (KJ) は、その「川喜田二郎」の頭文字) 創案の、情報を整理し仮説の発想を導く方法である。既存の知識や野外の観察で収集した情報、あるいは開放的な集団討議である「ブレーン・ストーミング」で出された意見を1枚のカードにつき1つの主題に限定して書きだし、多数のカード上の情報や意見を同類、対立、相関、因果、上下位などの関係における全体の構造として図解する。その過程で異質の情報の結合による創造的な発想が導かれるとされる (中島義明, 他編 (1999:213))。
- 3) テキストデータをさまざまな計量的方法によって分析し、形式化されていない膨大なテ

キストデータという脈の中からは、言葉（キーワード）どうしに見られるパターンや規則性を見つけ、役に立ちそうな知識・情報を取り出そうとする手法・技術（藤井, 李, 小杉 (2005:10)）。

4) 一人の回答者が、同一と見なされる感情を、異なる表現で複数回挙げた場合、これらの複数回答は1としてカウントした。

## 参考文献

- 大淵憲一(1999)『日本人の謝罪傾向の起源—比較文化的発達研究—』平成8年度稲盛財団助成金研究報告書
- 大淵憲一(2010)『謝罪の研究：釈明の心理とはたらき』東北大学出版会
- 川喜田二郎(1967)『発想法—創造性開発のために—』中央公論社
- 熊取谷哲夫(1993)「発話行為対照研究のための統合的アプローチ—日英語の「詫び」を例に—」『日本語教育』79, 26-40.
- 齊藤勇、荻野七重(2004)「自己呈示としての謝罪言葉の実証的アプローチ」『立正大学心理学部研究紀要』2, 17-33.
- 中島義明、他編(1999)『心理学辞典』有斐閣
- 藤井美和、李政元、小杉考司(2005)『福祉・心理・看護のテキストマイニング入門』中央法規出版
- 中川英和、山崎晃(2004)「対人葛藤場面における幼児の謝罪行動と親密性の関連」『教育心理学研究』52(2), 159-169.
- 中川英和、山崎晃(2005)「幼児の誠実な謝罪に他者感情推測が及ぼす影響」『発達心理学研究』16, 165-174.
- Darby, B. W., & Schlenker, B. R. (1982) Children's reactions to apology. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 742-753.
- Darby, B. W., & Schlenker, B. R. (1989) Children's reactions to transgressions: effects of the actor's apology, reputation and remorse. *British Journal of Social Psychology*, 28, 353-364.
- Itoi, R., Ohbuchi, K., & Fukuno, M. (1996) Across-cultural study of preference of accounts: Relationship closeness, harm severity, and motives of account making. *Journal of Applied Social Psychology*, 26, 913-934.
- Ohbuchi, K., Kameda, M., & Agarie, N. (1989) Apology as aggression control: Its role in mediating appraisal of and response to harm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 219-227.
- Robinson, J.D. (2004) The sequential organization of "explicit" apologies in naturally occurring English. *Research on Language and Social Interaction*, 37, 291-330.